



Title	不明確な項・命題における主題形式についての対照研究
Author(s)	風間, 伸次郎; Kazama, Shinjiro
Citation	北方言語研究, 16, 77-100
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99338
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99338
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_Kazama.pdf



不明確な項・命題における主題形式についての対照研究

風 間 伸 次 郎
(東京外国語大学)

キーワード：主題、対照研究、引用動詞、存在動詞

1. はじめに

日本語には「って」という一種の主題標示形式があり、話し言葉で頻繁に使用されている。同じく主題形式である「は」に対し、「って」は「とて」（さらには「と いひて」）を起源とし、話し手のよく知らないものを主題としてとりたて、疑問文などに現れやすいという性質を持つ。一方、トルコ語やハルハ・モンゴル語（以下では単に「モンゴル語」とする）、朝鮮語、ビルマ語、シンハラ語にも「(～と) 言う」（トルコ語は *de-*、モンゴル語は *ge-*、朝鮮語は *ha-*、ビルマ語は *shò*、シンハラ語は *kiya-*）に由来し、「って」に類似した状況で主題提示に使用される形式がある。

本稿ではこのような主題標示要素を「引用動詞由来の主題標示形式」（略して「引主形式」）と呼び、この要素についての言語間での対照言語学的な研究を行う。本稿で対象とするのは上記のトルコ語、モンゴル語、朝鮮語、ビルマ語、シンハラ語と日本語の 6 言語²（以下ではこれらを本稿の「対象言語」と呼ぶ）である。一方、引主形式を用いないと考えられる言語（ロシア語、スペイン語、中国語、ベトナム語の 4 言語³）についても確認のため若干の調査を行う。なお参考文献における例文の例文番号は本稿のものに統一した。

2. 先行研究

2.1. 日本語

下記日本語の「って」の諸先行研究の渉猟・整理にあたっては、松前 (2019) の記述を参考にした。

2.1.1. 引主形式の由来と意味機能の展開

佐藤 (2011: 4-5) は「って」は引用形式である「とて」（さらには「と いひて」）から生じたものであり、「言表・思考内容の引用」が最も基本的な働きであるとしている ((1))。この基本的な働きから「連体修飾」や「逆接」、「文末表現」の用法が派生するとしている

¹ 「話し手（もしくは聞き手）のよく知らない」ものを本稿では広く「不明確な」ものと呼ぶことにする。

² 筆者はこれまで SOV 語順を持つアルタイ型言語を中心に研究してきた（風間 (2022) 参照）。そのことに加え、この対象 6 言語に関しては日本語が堪能な話者の方が近くにいらして協力が得られる状況にあった。そこでこの 6 言語を対象言語とすることにした。

³ 本稿では SVO を基本語順とする孤立型言語には主題形式が発達しにくいという仮説を考察した (8 節)。3 節の予備調査でもこの仮説に沿った状況が観察された。さらに屈折型の言語や、若干孤立語化した印欧語族の言語における主題形式の状況も調査したいと考えた。そのことに加え、この 4 言語に関しては日本語が堪能な話者の方が近くにいらして協力が得られる状況にあった。そこで SVO 孤立型言語を中心とするこの 4 言語を重点的に調査することにした。

(2)、「逆接」と「文末表現」の用法は省略。

(1) 嫌だって思った。(言表・思考内容の引用)

(2) この犬、モカって名前なんだ。(連体修飾)

(佐藤 (2011: 5) より引用)

佐藤 (2011:9) によれば「って」の「主題提示」の用法は、「言表・思考内容の引用」と「連体修飾」の用法から、記号形式しか知らないものの提示という機能の形式(「～というもの」に相当する)が生じ、これによって成立したものだという。したがってその述語には提示された記号形式の属性などの記号内容に当たる表現が求められることになるとしている。

田窪 (1989) は「N って」をまず「記号の名前だけが定義されており、記号の意味、指示対象のうちのどちらか、あるいは両方が定義されていない要素を表わす形式」とした上で、「記号を新しく定義するとき、また、自分自身の発見により、記号を定義しなおすときにも使われる」と述べている。

2.1.2. 主題提示の「って」の2つの用法

丹羽 (1994) は主題提示の「って」の分類について、言葉を再現して提示する「って」と捉え直し主題を表す「って」の大きく2つに分けることができるとしている。

言葉を再現して提示する「って」は言葉の意味がわからない場合に最もよく用いられる(3))。これはメタ言語機能的用法であるとしている。

(3) 「この問題はゲノムの構造から考えた方がいいな。」「ゲノムって何?」

(丹羽 (1994: 80) より引用)

加えて、言葉そのものの意味はわかるものの、その状況・文脈においてどのような意味であるかを問う場合にも「って」は用いられる。以下に例を示す((4))。

(4) 「手術をすることになったよ。」「手術って何の手術ですか?」

(丹羽 (1994: 82) より引用)

加えて、いかなる言葉であるかを問題にする場合にも「って」は用いられる。「って」はこの場合、言葉を再現して主題として提示する役割をはたす。述部では多く真偽を問題にする((5))。

(5) さっき聞いたんだけど、山田がやめたって本当?

(丹羽 (1994: 83) を一部改変)

捉え直し主題を表す「って」は、言葉そのものを問題にするのではなく、言葉によって表される事物を問題にする場合に用いられる((6)、(7))。

(6) 田中さんって意外に引っ込み思案なんだよね。

(7) 誰かB型の人っていますか?

(丹羽 (1994: 86-87) より引用)

捉え直し主題を表す「って」を用いた文には、(6) のように属性を表す場合と、(7) のように存否を表す場合が存在する。「って」の上接部分を X とすると、(6) は X がいかなるものかを表し、内実を捉え直す役割を果たす。(7) は X についてそれが存在するかどうかを捉え直している。

2.1.3. 主題提示の「って」における新しい用法の展開

上記のように「って」は①話し手にとって良くわからないものが対象の場合、②話し手にとってその対象が何であるかはわかるものの、言われた発話意図や内容の方がわからなくて聞き返す場合、③わかっている対象だがその属性や存否がはっきりしない場合、に用いられることがわかる。

さらに佐藤 (2011: 16) は典型的である属性表現や存否表現から、「好き嫌い」や経験の有無などへ、さらなる用法の広がりが見られることを指摘している。

- (8) 私、土曜日って大好き。(好き嫌い)
- (9) ザリガニって食べれるんですか? (可能)
- (10) キャベツ人形って知ってる? (知識の有無)
- (11) 銭湯って行ったことある? (経験の有無)

(佐藤 (2011: 16-17) より引用)

筆者の考えでは、(9)-(11)は話し手にとってわかっているものであるが、④聞き手の状況が話し手にとって不明であるため聞き手の状況を訊く疑問文の場合に、「って」が使われているものであろう。

話し手にとってよくわかっているものに「って」を使う場合もある。下記のような例も捉え直し主題とみることができるだろう。

- (12) イチローってすごい選手だね。
- (13) 私ってだめね。

(朴 (2006: 113) より引用)

- (14) (目の前のものを指さして) これって何ですか?
- (15) 今日って何日ですか?

(藤村 (1993: 45) を一部改変)

ただしこうした用法の使用には個人差があり、藤村 (1993) が名古屋大学の学生 48 名を対象に行ったアンケートでは、(14), (15) を「全く自然 (若者言葉的でさえない)」と答えたものの割合はどちらもほぼ 2 割であったという。(3), (4), (5), (6) などは「って」を「というのは」に置き換えて「ゲノムというのは何?」「手術というのは何の手術ですか?」などと言うことができるが、(14)や(15)では置き換えにくい (藤村 (1993: 47))。(3), (4), (5), (6) は「は」に置き換えられないが、(14), (15) において「は」への置き換えはきわめて自然である (丹羽 (1994: 89) に同趣旨の分析がある)。

2.1.4. 「って」のモダリティ的・情報構造的性格

手塚 (2001) はモダリティの観点から「って」形式の文のタイプを次の 4 つに分類している。

- A 「発見」 例) タピオカって結構おいしいなあ。
- B 「質問」 例) これって誰の? 山田が大学やめたって本当?
- C 「同意要求」 例) さやかちゃんってやさしいよね。
- D 「教え」 例) 中国って人口が多いんだよ。

丹羽 (1994: 11) は「って」が以上のようなモダリティの文に現れることは「って」が持つ「記号形式しか知らない要素として提示する」という機能と密接にかかわっている」とし、一方で「って」は次のような断定のモダリティとは共起しない」としている。

(16) 山田さんって教師だ。

その理由について丹羽 (1994: 12) は「ここには「って」に呼応するような「新しい認識」や「再認識」が含まれていないからである」とし、「同じ内容でも「発見」や「教え」「質問」「同意要求」のモダリティを用いれば適格な文となる」という。

- (17) 山田さんって教師なんだ。(発見)
- (18) 山田さんって教師なんだよ。(教え)
- (19) 山田さんって教師なの?(質問)
- (20) 山田さんって教師だよ。(同意要求)

丹羽 (1994: 11-12) は「って」と「(というのは)」の談話における出現位置の違いにも触れている。

- (21) 時代に合わせた本 {って/というのは} よくありますからね。
- (22) ねえ、時代に合わせた本 (って/? というのは) よくあるじゃない。

すなわち (22) で「って」の適格性が低いのは、話し言葉の談話の冒頭に用いにくい「は」の性格によるとしている。「これに対して「って」というのは新主題を設定する性格があり、話し言葉の平叙文の談話の冒頭であってもごく自然に用いられる」としている。

有田・田窪 (1995: 44) 「A は B」を提題 A に関する B という題述であるとし、「述語付けのためには、その対象の属性は定まっていなければならない、話し手にその意味と存在が前提されて⁴いなければならない」とする。したがって「A に当たる名詞句は談話照応的であり、かつ、指示的 (referential) あるいは総称的 (generic) であるのが普通である」としている。したがって上記 (22) のように談話の冒頭で「は」が使用しにくいのは、「は」が談話照応的で指示的であるためだと説明することができよう。一方、「って」は先に見たように「記号の意味、指示対象のうちのどちらか、あるいは両方が定義されていない要素を表わす形式」であるため、このような制約を受けないものと考えられる。

⁴ 「前提されて」という表現は原文のまま。

なお (22) のような談話冒頭での話題の導入に際して、「～ってあるじゃない」のようにまずその存在に関して聞き手の同意を得てから会話を始めていることにも注意しておきたい。

2.2. トルコ語の引主形式

竹内 (1989: 96) には次の例文⁵が見いだされる。一方、文法書である Göksel and Kerslake (2005) にはこうした主題標示要素の記述は見つからない。

- (23) Para dedigin nedir?
 お金 というのは 何だ？

2.3. モンゴル語の引主形式

角道 (2025) では主題標示形式として Ceval (1966: 38) より次の例文を見だし、これを示している。一方、文法書である Kullmann and Tserenpil (1996) や Janhunen (2012) にこうした主題標示要素の記述は見つからない。

- (24) Tujaa gež ta juu?
 トヤー というのは あなた ですか。

- (25) Uxaantaj bolor gež jamar čuluu ve?
 理性のある 水晶 というのは どんな 石 ですか。

3. 予備調査

東京外国語大学語学研究所の特集データのデータベース『語研論集データベース』ではいくつかの文法カテゴリーを中心に、統一的な調査例文に基づく多様な言語のデータが公開されている。そのうち「10. 否定、形容詞と連体修飾複文」の例文[25]は「あの人が結婚したという噂は本当（か）？」である。主題となっている名詞項「あの人が結婚したという噂」は、話し手にとって全く未知なモノ／コトではないものの、調査例文に引主形式が含まれており、文全体は YesNo 疑問文となっている。したがってデータベース中の例文の中では本稿が問題にしている形式や構文にもっとも近い。本稿の研究対象は日本語で不明確な主題を「って」によって示すものであるため、「あの人が結婚するって本当（か）？」のような例文であれば最善であったのだが、まずはどんな言語で引主形式が用いられているのかを知るにはこの調査例文による対照データの結果をみるのが次善の策としてよいと判断した。2025 年 12 月の時点でこの調査例文に関しては上記データベースにより 42 言語の対応表現を観察することができる。そこでこの 42 言語の対応表現に引主形式が観察されるかを調査してみたところ、次のような結果となった。なお下線を付した言語、すなわちロシア語では 2 種類の例文がバリエーションとして挙げられていて、一方の文には引主形式が現れていたがもう一方の文には現れていなかった。

⁵ 本稿のトルコ語のコンサルタント (4 節の表 1 参照) によれば、この文は「お金というものは何か？」という哲学的な問いであり、「今、話題に出てきたお金というのは何に使う誰のお金か？」というような指示対象が不明確な場合の問いではないという。

[引主形式が観察された言語]: 12 言語

フランス語、チェコ語、ロシア語、アラビア語エジプト方言、ビルマ語、タタール語、サハ語、ソロン語、エウエン語、モンゴル語、朝鮮語、大阪方言

[引主形式が観察されなかった言語]: 31 言語

グイ語、アイスランド語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、ブルガリア語、ポーランド語、ロシア語、ウクライナ語、ラトヴィア語、リトアニア語、ヒンディー語、ペルシア語、フィンランド語、トルコ語、ナーナイ語、ジョージア語、カンボジア語、ラオ語、ベトナム語、タイ語、マレーシア語、インドネシア語、タガログ語、メエ語、中国語（漢語普通話）、漢語平江方言、漢語諸暨方言、チナンテク語オスマシン方言、トラパネク語（メパー語）

引主形式が観察された言語にはアルタイ諸言語が多く含まれることがわかる。ツングース諸語のひとつであるナーナイ語には引主形式が観察されなかったが、媒介言語として使用したロシア語の表現に引きずられたため用いられなかった可能性がある。引主形式が観察されなかった言語のうちアイスランド語、ナーナイ語、中国語では「私は彼が結婚したと聞いたがそれは本当か?」のような表現、すなわち「聞く」という動詞を含んだ表現が観察された。この表現は引主形式に近い機能を果たしているものかもしれないが、「噂」という名詞の意を翻訳しようとしたものとも考えられる。

引主形式が観察された言語のうち、本稿で（系統的に近い言語さえも）調査できなかったアラビア語エジプト方言については、語研特集データの例文を確認しておく。

(26) el-ʔiʃa:ʃa ʔinnə ʃ-ʃaʃsə-da tgawwez ʃahi:ha?

DEF-うわさ ~という DEF-人-あの 結婚した.3 本当.F

「あの人が結婚したという噂は本当（か）？」

（例文・グロス・訳ともに長渡 (2019) による）

チェコ語およびフランス語の調査結果の文では「噂」に対応する名詞が現れておらず、「彼が結婚したと言うのは本当か?」のような表現となっていた。したがって「噂」の意を表現するために用いられた形式である可能性もある。サハ語のデータ（江畑 (2022: 543)）で用いられていた *dien* のグロスは QUOT となっていたが、歴史的にはトルコ語の *de-* と同語源の形式に遡るものとみて引主形式が観察された言語に含めることとした。

他方、アルタイ諸言語であるが引主形式の観察されなかったトルコ語について語研特集データの例文をみる。ここでは単なる外の関係の連体修飾で内容を持つ名詞「噂」を修飾する表現になっている。

(27) Onun evlen-miş ol-duğ-u söylenti-si doğru mu?

彼の 結婚する-PTCP なる-PTCP-POSS.3SG 噂-POSS.3SG 正しい Q

「あの人が結婚したという噂は本当（か）？」

（例文・グロス・訳ともに奥 (2019: 199) による）

4. 調査方法

コンサルタントより聞き出しを行った。どの方も日本語が堪能であるため、日本語による例文を提示し、話し言葉において自然と思われる表現に訳していただいた。

表 1：コンサルタントの情報

	生年	言語形成期を過ごした場所
トルコ語	1996	アンカラ、イスタンブール
モンゴル語	1989	ウランバートル
朝鮮語	1978	慶尚北道醴泉郡
ビルマ語	1978	ヤンゴン
シンハラ語	1995	クリヤーピティヤ市（クルネーガラ地方）
ロシア語	1981	キーウ（ウクライナ）
スペイン語	2001	ブエノスアイレス
中国語	1979	東北地区
ベトナム語	1998	ダナン市（ベトナム中部）

日本語の先行研究の記述や観点を踏まえ、母語話者に負担にならないと思われる量の調査用の例文を作成した。聞き出しに使用したのは以下の例文である。

- [1]「ゲノムって何？」[話し手がその記号の意味を知らない対象である主題]
- [2]「A さんというのはあなたですか？」[話し手が該当する対象を知らない主題]
- [3]「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」[話し手が、その語の構成要素の意味は知っているがやはり全体の意味を知らない対象である主題]
- [4]「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」[聞き手が、その語の構成要素の意味は知っているがやはり全体の意味を知らない対象について問われた問いに返答した際の主題]
- [5]「A さん／山田さんがやめたって本当？」[話し手が知っている対象であるが、その対象についての聞いた事柄を再現もしくは引用してその命題の真偽を確認しようとする主題]
- [6]「今日って何日ですか？」[話し手がわかっている対象であるが、それを捉え直ししてからその属性を問う主題]
- [7]「A さん／山田さんって面白い人ですね。」[話し手がわかっている対象であるが、それを捉え直ししてからそれについての個人的な感想を聞き手に確認しようとする主題]
- [8]「私、土曜日って大好き。」[話し手がわかっている対象であるが、それを捉え直ししてからそれについて個人的な好き嫌いを述べる主題]

5. 引主形式を用いない言語についての調査結果

例文の提示に際しては次のような言語の略号を用いる。(R): ロシア語, (S): スペイン語, (C): 中国語, (V): ベトナム語。なおロシア語はキリル文字から ISO/R 9 1968 の方式によりローマ字に翻字して示した。固有名詞の「A さん」は各言語で一般的な名前にしてくださったが、ベトナム語の話者の方は後半の調査例文にあった Yamada をもっぱら使用してい

る。紙幅の都合から引主形式を用いない言語の調査結果の例文にはグロスを付さない。

- [1] 「ゲノムって何？」 (R) Čto že takoe «genom»? / (S) ¿Genomu qué es? もしくは ¿Que sería Genomu? / (C) “genomu” 是什么？ / (V) “BỘ GIEN” là gì?
- [2] 「A さんというのはあなたですか？」 (R) Saša – vy? / (S) ¿Miguel serías vos? / (C) 你就是那个小王吗？ / (V) Người tên là Yamada là bạn phải không?
- [3] 「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」 (R) “Govorjaščij kamen’” – êto kakoj kamen’? / (S) ¿”Una piedra que habla” qué tipo de piedra sería? / (C) 会说话的石头，是什么样的石头呀？ / (V) “Đá Azurite” là đá như thế nào?
- [4] 「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」 (R) “Govorjaščij kamen’” – êto vot takoj kamjen’. / (S) “Una piedra que habla” sería este tipo de piedra. / (C) 会说话的石头，就是这样的石头。 / (V) “Đá Azurite” là đá như thế này.
- [5] 「A がやめたって本当？」 (R) Pravda, čto Sergej brosil rabotu? / Eto pravda, čto Sergej brosil rabotu? / (S) ¿Eso de que Miguel dejó el laburo es posta? / (C) 小王辞职了，是真的吗？ / (V) Yamada nghỉ việc là thật?
- [6] 「今日って何日ですか？」 (R) Segodnja kakoe čislo? / (S) Hoy ¿qué día es? / (C) 今天是几号（来着）？「来着」はなくてもいい。あるとより口語的 / (V) Hôm nay là ngày mấy?
- [7] 「A さんって面白い人ですね。」 (R) Mixail – interesnyj vsjo-taki čelovek. / (S) Miguel es un tipo gracioso. / (C) 小王真是一个有意思的人，是吧！ / (V) Yamada đúng là người thú vị nhỉ.
- [8] 「私、土曜日って大好き。」 (R) Kak že ja ljublju subbotu! / (S) A mí los sábados me encantan. / (C) 我特别喜欢周六。 / (V) Tôi rất thích thứ bảy

4 言語とも SVO を基本語順とし、主題を示す明示的な形式を持たない言語である（風間・山田 (2021: 68-69) の一覧表や同書の各言語の記述なども参照されたい）。風間 (2022: 516) では「SVO 型言語、中でも特に形態的に孤立型で、文法標示要素が極端に少なく、名詞の格標示を持たない言語では、V の前後の位置によって S と O を区別するというその統語的な制約上、主題がくるべき文頭の動詞直前位置に主語が来なければならない、よって文頭の動詞直前位置にくる名詞は主題と主語を兼ねることが多くなると考えられる」と述べた。中国語とベトナム語は格を持たない SVO 語順の孤立型言語であり、「V の前」という位置で主語兼主題が示されるため明示的な主題標示も主語標示も必要ない。さらに、孤立型言語は形態的な文法標示が最小限であるという理由もあり、主題標示も主語標示も存在しないと言うことができる。スペイン語は語順の縛りがやや緩く（風間・山田 (2021: 149-150)）、拘束的な代名詞で（間接）目的語等を主要部標示的に示すこともできるが、やはり一般の名詞には格がなく明示的な主題標示も持たない。ロシア語は 6 つの格を持ち語順もかなり自由だが、この言語ではその自由な語順が情報構造の標示を可能にしており、主題要素は文頭に、焦点要素は文末に置かれる（風間・山田 (2021: 176)）。

したがってこれらの言語は明示的な主題標示を持たない、という共通点を持つことがわかる。明示的な主題標示を持たないことは、これと対立する引主形式の主題標示を持たない理由であると筆者は考えているが、この点については 7 節の結論部分で詳述する。

6. 引主形式を用いる言語についての調査結果

筆者がこれまで研究してきた言語群であり、予備調査でも引主形式を使用していたトルコ語、モンゴル語、朝鮮語についてまず調査を行った。その結果を日本北方言語学会の第8回大会で発表した際に、いくつかの有益なコメントをいただいた。ビルマ語に引主形式のあることについてのコメントもいただいた。そこでさらにビルマ語とシンハラ語の調査を行うこととした。ビルマ語を調査したのは予備調査でも引主形式を用いることがわかっていたためでもある。シンハラ語は偶然に日本語の流暢な話者の方がいらしたので調査をお願いすることになった次第である。翻訳していただいた表現に引主形式が現れた場合には、それを取り去ったり他の主題標示形式に置き換えられるかどうか可能な限り訊いた。例文の提示や対照分析に際しては次のような言語の略号を用いる。(T): トルコ語, (M): モンゴル語, (K): 朝鮮語, (B): ビルマ語, (S): シンハラ語。固有名詞である人名には、アリ(T)／トヤー(M)／チョルス(K)／アウンアウン(B)／カスン(S) など各対象言語で自然な名前を使って下さっていることに注意されたい。

以下では各対象言語における調査結果を順に示す。引主形式は太字にし、文の逐語的な訳と引主形式のグロスを示す。その他の関連する機能（不明確性を示す機能）を示していると考えられる形式には下線を付す。

6.1. トルコ語

トルコ語には明示的な主題標示の形式はなく、基本的にはだかの名詞の形が主題として機能する（奥 (2019: 189)）。

[1] 「ゲノムって何？」

(T-1a) Genom **(dediğin)** ne (ki)? (de-diğ-in: say-PTCP.PFV-2SG.POSS)

「ゲノム とあなたが言ったのは 何 なの？」

(T-1b) Genom **denen şey** ne? (de-n-en şey: say-PASS-PTCP thing)

「ゲノム という ものは 何？」

[2] 「A さんというのはあなたですか？」

(T-2a) Ali **(dedikleri)** sen misin? (de-dik-ler-i: say-PTCP.PFV-PL-3POSS)

「アリ と（人々が）言ったのは 君 ですか？」

(T-2b) Sen misin Ali?

「あなたなのか アリ？」

[3] 「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」

(T-3a) Konuşan taş **(dedikleri)** nasıl bir taş?

「しゃべる 石 と（人々が）言うのは どんな ある 石？」

(T-3b) Şu konuşan taş nasıl bir taş?

「その しゃべる石 どんな ある石？」

[4] 「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」

(T-4a) Konuşan taş böyle bir taş.

「しゃべる 石 こんな ある石。」

(T-4b) Konuşan taş var ya, böyle bir taş.

「しゃべる 石 ある でしょ こんな ある石。」

(T-4c) Hani konuşan taş **derler** ya,

「ほら しゃべる石 と（一般に）言う んだけど

işte böyle bir taş. (de-r-ler: say-AOR-PL)

ほら こんな ある石。」

var ya: exist but という要素もこうした場合の主題標示に用いられることがわかる。談話にある名詞を導入する際に存在述語による表現が用いられていたことがここで想起される(2.1.4. 節参照)。

[5] 「山田がやめたって本当？」

(T-5a) Yamada işten ayrılmış mı?

「山田 仕事から離れたそう なのか？」

(T-5b) Yamada işten ayrıldı (**diyorlar**)

「山田 仕事から離れた と（人々が）言っているのは

doğru mu? (di-yor-lar: say-PRS-PL)

正しい か？」

(T-5c) Yamada işten ayrıldı (**deniyor**)

「山田 仕事から離れた と言われているのは

doğru mu? (de-n-iyor: say-PASS-PRS)

正しい か？」

[6] 「今日って何日ですか？」

(T-6) Bugün ayın kaç?

「今日 月の いくつ？」

[7] 「山田さんって面白い人ですね。」

(T-7a) Yamada Bey ilginç biri dimi? (dimi は正書法での değil mi にあたる)

「山田 さんおもしろい 人 じゃない？」

(T-7b) Yamada Bey (var ya) ne ilginç biri dimi?

「山田 さんいる でしょ なんと おもしろい 人 じゃないか」

[8] 「私、土曜日って大好き。」

(T-8) Ben cumartesi (var ya) çok severim.

「私 土曜日 ある でしょ とても 好き。」

上記の調査結果から、トルコ語の場合、引主形式はもっぱら疑問文に現れ、その発話の内容や状況によって異なるテンス・モダリティ・きれつづきの接辞や異なる人称をとることがわかった。コンサルタントによれば、上記の引主形式はどれも取り除いても問題はなく、自然さが変わるわけでもないという ((T-1b) を除く)。逆に引主形式が出てこない場合は、無理やり入れても不自然であるという。引主形式が現れなかった疑問文は(T-6)「今日って何日ですか?」であるが、「今日」は話し手にとっても聞き手にとっても自明な要素であるためトルコ語では引主形式が用いられないものと考えられる。疑問文でなくても、(T-4b)のように「しゃべる石」のように聞き手がそれを知らないことが予想される全く一般的ではない要素を提示する際には、引主形式が用いられることがわかる。

一方、疑問文でない文 ((T-4b), (T-7b), (T-8)) においては、var ya 「いる／ある けど」のような形式が用いられた。これは存在を示す述語 var によって、その存在をまず示してから述語を展開するというストラテジーに拠っていると思われる。以下ではこのように存在述語に由来する主題形式を「存在述語由来の主題標示形式」(略して「存主形式」)と呼ぶことにする。

6.2. モンゴル語⁶

モンゴル語の主題形式には他に bol, n', čin' などの形式もあるが、明示的な形式がなくはだかの名詞の形が主題として機能することが多い。これらの主題形式の使い分けに関しては風間 (2024) も参照されたい。

モンゴル語の引主形式はもっぱら gež の形をとるが、下記に見るように gedeg も現れる(角道 (2025) 参照)。

[1] 「ゲノムって何?」

(M-1) Genetik **gež** juu ve? (ge-ž: say-CVB.IPFV)
「ゲノム って 何 か?」

コンサルタントによれば、gež を外せば「って」のニュアンスはなくなるという。bol は使用できず、n' か čin' に置き換えると、「(これの) ゲノムはどうなっているの、どういう構成になっているの?」、「君の(君が扱っているものの) ゲノムは何?」というような意味になる。つまり主題の持つ不明確さはなくなる。

[2] 「A さんというのはあなたですか?」

(M-2a) Tujaa **gež** ta juu?
「トヤー というのは あなた か?」

(M-2b) Ta Tujaa juu?
「あなたが トヤー か?」

⁶ モンゴル語の翻字は次のような方式に拠っている: a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, е = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, о = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, щ = šč, ъ = ", ы = y, ь = ', э = e, ю = ju, я = ja。

上記の通り、*gež* を取り外す場合には語順を変える必要があり、語順を変えない場合、非文になるという。なおこのペアは疑問の倒置同定文と同定文として分類されている（西山 (2003: 122)）。

(M-2c) *Tujaa gedeg n' ta juu?* (ge-deg: say-PTCP.HAB)

「トヤーというのは あなた か？」

意訳：「(この人が言っている) トヤーというのはあなたのことか」

ここでは *gež* と *gedeg* の違いが現れている。具体的に言えば、*gež* が該当項が全く不明な対象を示していてかなり文法化しているのに対し、*gedeg* はまだ *ge*-「言う」の意味が若干残っていて、実際に発話した人物が具体的に念頭にあげている。

čin' と *bol* の使用は、両方とも非文となるという。なおこの文では 2 人称にすでに *ta* が使われているため、*čin'* が使えなくなっているものと考えられる。

[3] 「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」

(M-3) *Jar'dag čuluu gež jamar čuluu ve?*
「しゃべる 石 って どんな 石 か？」

gež を取ると非文になるという。まず *bol* は使えず、*čin'* に置き換えると、「(あなたの話している・持っている) しゃべる石って、どんな石ですか」というニュアンスに変わる。ここでもやはり主題の持つ不明確さはなくなる。

[4] 「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」

(M-4a) *Jar'dag čuluu gež ijm čuluug xeldeg jum.*
「しゃべる 石 って こんな 石を 言う ものだ。」

gež を取ると非文であるという。*bol* を使うと断定となる。

(M-4b) *Jar'dag čuluu gedeg { čin' / n' / bol }*
「しゃべる 石 というの は
ijm čuluug xeldeg jum.
こんな 石を 言う ものだ。」

上記の文は *V-dAg*⁷ による形動詞句が名詞相当となり、これが主語にも補語にもなっているコピュラ文であると分析できる。*gedeg* によって聞き手にとって不明確な主題であることはすでに明示されているため、その次の位置に現れる主題標示形式は何であっても成立するものと考えられる。この文はモンゴル語において引主形式と他の主題形式が相補分

⁷ 文法形式における大文字の使用は母音調和による異形態のあることを示す。

布をなすとは限らず、同一文中に共起し得るものであることを示している。

[5] 「山田がやめたって本当？」

(M-5) Jamada { bol'son / aźlaasaa garsan } gež ünen üü?
「山田 {やめた / 仕事から 出た} って 本当 か？」

Jamada { bol'son / aźlaasaa garsan }?, ünen üü? のように 2 文に切ってそれぞれを疑問の上昇イントネーションに変えない限り、gež を外すと非文になるという。つまり、主題自体が明らかに不確かな命題である場合、引主形式は外せないことがわかる。なお日本語でも「*山田がやめたのは本当？」のように「は」を用いれば非文になる。トルコ語ではこの場合に引主形式は必須ではなかったが、伝聞の用法を含む間接過去である -mlş が使用されていたために命題の不明確さが保証され、引主形式が必要でないのかもしれない。

bol は使用できず、n'にはニュアンスを変えずに置き換え可能であり、čin'の場合、「山田、(あなたが) 辞めたって本当？」というふうに山田本人に確認しているニュアンスに変わる。

[6] 「今日って何日ですか？」

(M-6) Önöödör čin' xeden bilee?
「今日 は いくつ だった？」

gež がない方が自然であり、入れると不自然に感じるという。「今日」という語の意味や指し示す対象は話し手にとっても聞き手にとっても自明のものであるので、モンゴル語ではその場合には使えないということであり、このことはモンゴル語では日本語ほど引主形式の文法化が進んでいない、ということの意味していると考ええる。

[7] 「山田さんって面白い人ですね。」

(M-7) Jamada (gež) sonirxoltoj xün jumaa.
「山田 って おもしろい 人 ですね。」

上述のようにモンゴル語では主題を示す形式に他に n', čin', bol といった形式がある。この場合、n' や čin' に変えても「って」のニュアンスは失われないが、bol にすると「山田さんはおもしろい人です」という断言となり「って」のニュアンスはなくなるという。

[8] 「私、土曜日って大好き。」

(M-8) Bi xagassajnd xamgijn durtaj.
「私 土曜日に 一番 好き。」

gež がない方が自然で、入れれば非文になるという。なお査読者の方からは「xagassajnd の与格がない場合でも gež の使用は不自然と判定されるか？」という御質問があったが、

コンサルタントに訊いたところ非文と判定された。durtaj は与格名詞を要求するのでそもそも与格がなしでは文が成立しないという。

6.3. 朝鮮語

朝鮮語のハングルからの翻字表記は河野 (1955) の方式に基づく。例文の文法性判断における ?? はコンサルタントが「(対比などの) 異なる文脈がない限り言わない」と判断したものである。

下記の調査結果においては、-(i)ran 「～とは、～という」、'issjanh'a 「～(が) ある／いるじゃない」の使用が見られた。

-(i)ran は指定詞 (コピュラ動詞)⁸ -'i- に、指定詞につく引用形式 -rago が後続し、さらに「(～と) 言う、(～と) 思う」の意味も持つ ha-「する」の現在連体形 ha-nun が後続した -(i)rago hanun 「～という」が縮約した形式である (以上の分析は油谷他 (編) (1993) に基づく)。したがって ha-「(～と) 言う」という発言動詞の要素を含んでいるのでこれも引主形式とみる。

Kim (2004) は 'issjanh'a を 'iss-「ある／いる」の否定形に由来する (< 'iss-ji anh-'a-) としている⁹。トルコ語で観察された var ya と同様に存在動詞から文法化しつつある要素であることが興味深い。

他方、朝鮮語には日本語の「は」と「が」に機能的にかなりよく対応する主題標識 =(nu)n と主格標識 ='i/=ga が存在する。ただし日本語とは異なり、疑問詞疑問文の主語は対比のニュアンスを伴わない限り主格標識の ='i/=ga で示される (油谷他 (編) (1993: 1))。

[1] 「ゲノムって何？」

(K-1) goinom { 'iran / ??=Ø / ??='un / ??='i } mu'os 'inga?
「ゲノム { とは / Ø / は / が } 何 か？」

[2] 「A さんというのはあなたですか？」

(K-2) cörsu { =ranun bun='i / ??=Ø / =ga / ??=nun } dajsin 'ibnigga?
「チョルス { という 方が / Ø / が / は } あなた ですか？」

油谷他 (編) (1993: 1) には =ga について「非了解事項を表わす: ...って、...とは。 gu gon 'ihyönsugssi'oigoi mur'ö bosoi'yo. —'ihyönsugssiga nugubnigga? それはイヒョンスクさん

⁸ 活用が動詞とは若干異なるため、朝鮮語学では動詞とは別の品詞「指定詞」とされる。

⁹ Kim (2004) は 'issjanh'a を「談話標識」とし、もっぱら談話的機能に注目している。Kim (2004) は 'issjanh'a の諸機能を次のようなものとして記述している。本稿が注目したような観点からは分析していないが、「話題を導入する機能」を指摘している点は注目に値する: 1. 会話の開始機能: 会話を始めたい人が、最初に 'issjanh'a を置くことで、対話を始めたいという意志を相手に伝える。2. 話題を導入する機能: 話者が 'issjanh'a を主題や話題の後ろに置くことで、その話題に相手を誘導しようとする。3. 会話を締めくくる機能: 話者が会話の途中に 'issjanh'a を置くことで、それまでの話を締めくくり新しい話題へと導く。4. 間を取る機能: 話者が単語、句、または節の後に 'issjanh'a を置くことで、自分自身が考えるための時間稼ぎをする。5. メッセージを強調する機能: 話者が単語の途中に何度も 'issjanh'a を使うことで、聞き手にメッセージを一つ一つ確実に伝えようとする意図を表す。

にお尋ねください。—イヒョンスクさんって誰ですか。」(翻字と太字は筆者による) という記述がある。

[3] 「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」

(K-3) “mar hanun dor” { iran / =Ø / =’i / ??=’un } mu’os ’ibnigga?
「話 する 石」 { とは / Ø / が / は } 何 ですか？」

[4] 「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」

(K-4) “mar hanun dor” { iran / =Ø / =ga / ??=nun } ’irøn dor ’ibnida.
「話 する 石」 { とは / Ø / が / は } こんな 石 です。」

[5] 「山田がやめたって本当？」

(K-5) ’yamada=ga gumanduɔssda
「山田が やめた
{ =nun go=i / =nun go=Ø / ??=nun go=n } jəŋmar ’i’ya?
{ という ことが / という こと Ø / という ことは } 本当 なのか？」

上記の例文における =nun go の =nun は主題標識ではなく、 ha-nun: say-PRS.ANF 「～(と)言う」の短縮形である(菅野他(編)(1988: 182))。したがって引用形式に由来する形式であるということはできる。しかし S(entence)=nun go はそれ全体で名詞句として機能し、(K-5) にみるようにさらにその後ろに主格や主題の形式が後続し得る。すなわち引用形式由来だが主題標示形式ではないという中途半端な形式ということになる。

[6] 「今日って何日ですか？」

(K-6) ’onuur { =’i / =Ø / ??=’un } myɔcir ’i’oi’yo?
「今日 { が / Ø / は } 何日 ですか？」

[7] 「山田さんって面白い人ですね。」

(K-7) ’yamada ssi { issjanh’a / =Ø / =nun / ??=ga } jaimi’issnun saram ’inoi.
「山田 さん { いるじゃない / Ø / は / が } おもしろい 人 だよ。」

[8] 「私、土曜日って大好き。」

(K-8) jɔ=nun to’yo’ir { =’i / =Ø / ??=’un } nɔmu joh’a’yo.
「私は 土曜日 { が / Ø / は } とても 好き。」

6. 4. ビルマ語

ビルマ語の主語、特に主題性の高い主語名詞を標示する形式について、Kato (2004) は下記のように述べている(筆者要約による)。

まずビルマ語は口語体と文語体で異なる助辞類を用いるが、口語体において主語名詞の標示には主に (1) 助辞 *hà* が付く、(2) 助辞 *kâ* が付く、(3) 無標示、の3通りがある。このうち *hà* は主語にのみ付き、日本語の「は」に似た機能を持つとも言われるが、対比を表わすことはできず、むしろ「見かけの口語体」と呼ばれる文語体の影響を受けた口語体でよく用いられる。*hà* は動詞が意味的に要求するような名詞項をすでに取っている場合や、そのような名詞項がない場合には副詞的な要素を取っている場合に使われる。この両者のような場合を Kato (2004) は主語名詞の主題性の高い場合であるとしてまとめている。これに対し純粋な口語体における主題性の高い主語には何もつけないのが基本である。ただし主語を特定するのが難しい文の場合に主語を明示するためには *kâ* が付く。したがって *kâ* には対比を示す用法がある。

無標示を含む上記の形式 (*hà*, *kâ*) と日本語の「は」「が」を対照したトゥザライン (2015) ではその分析結果を次のような表にまとめている。

表2：日本語とビルマ語における助詞の出現の可能性

	日本語		ビルマ語						
			文語体			口語体			
						見かけ			
助詞	は	が	<i>ṭi</i>	<i>kâ</i>	無標	<i>hà</i>	<i>hà</i>	<i>kâ</i>	無標
判断	○	×	○	×	×	○	○	×	×
現象	×	○	×	×	○	×	×	×	○
対比	○	×	○	○	×	○	×	○	×
排他	×	○	×	○	×	○	×	○	×

(トゥザライン (2015:61) より引用、ただし諸形式のスコープや {新/旧} 情報の標示に関する違いを対照した表の下半分は割愛した、なお *ṭi* は文語体で現れ主語を示す助詞であるという (トゥザライン (2015:49)))

Kato (2004) とトゥザライン (2015) の記述は概ね一致しているが、口語体の判断文で Kato (2004) は無標示が基本であるとしているのに対し、トゥザライン (2015) は無標示を不可としている点が異なる。ただしトゥザライン (2015) が判断文とみなしている文は一般に考えるような判断文よりややその範囲が狭いようで(「カラスの鳴き声はお客さんが来るという前兆だ」「お金は人生を変え得る」のような意味の一般論の意の文を挙げている)、「私の荷物は検査済です」(荷物が目の前にある場合)のような文では無標示が使われるという。

なおビルマ語には日本語の連濁とよく似た有声化現象があり、必ずしも規則的ではないが、付属語については一律に適用される(藪 (1992:569))。したがって下記の (B-5) や (B-6) などでは *-kâ* の有声化した異形態の *=gâ* が現れていることをことわっておく。

[1] 「ゲノムって何？」

(B-1) gènômû s'hò=dà bà=lé? (s'hò=dà: say=NC.RLS)
「ゲノム と言うのは 何か？」

この文の引主形式を取り去ることはできないという。この状況で s'hò=dà (say=NC.RLS) を主格標示の =kâ に代えて言うこともできるが、その場合は「(他のものでなく) ゲノムは何か？」というニュアンスになるという。

[2] 「A さんというのはあなたですか？」

(B-2) ?àun?àun s'hò=dà mín=lá?
「アウンアウン と言うのは 君か？」

この文の引主形式を取り去ることもできず、別の状況でしか使えない別の文になってしまうという。

[3] 「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」

(B-3) zāgá+pyó=dê tcəu?tóun s'hò=dà bālò tcəu?tóun-myó=lé
「言葉話す 石 と言うのは どんな 石 (の類) か？」

[4] 「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」

(B-4) “zāgá+pyó=dê tcəu?tóun” s'hò=dà dilò tcəu?tóun-myó=bà.
「言葉話す 石 と言うのは こんな 石 (の類) です。」

(B-3) と (B-4) でも引主形式を取り去ることはできないという。

[5] 「A さん／山田がやめたって本当？」

(B-5) ?àun?àun (?ālou?/tcəun) t'hwe?lai?tè s'hò=dà dāgè=lá?
「アウンアウン (仕事／学校) やめた と言うのは 本当か？」

この状況で引主形式¹⁰を取り去った文を言うには、驚いた感じで文末を上昇調で発音するか、いったん「アウンアウンはやめた」で文を終わらせ、「(それは) 本当？」のように淡々とした感じで質問を続けるような言い方にしなければならないという。

¹⁰ 査読者の方より、このビルマ語の (B-5) における s'hò=dà、ならびに次のシンハラ語の (S-5) における kiya-nne は、先行要素が文の形をしているので引用標識とみる解釈が可能ではないか、というコメントをいただいた。形の上では見分けがつかないため、その解釈の余地はある。ここで後続する述語は「本当か？」という名詞述語であり、「言う」「思う」など引用標識を要求する述語ではないので、引用標識の典型的な例であるともいえない。しかし振り返って考えると本稿で問題にしている日本語の「って」にも「「あいづが来る」って「言ってたよ／思ったんだ」」のように引用標識の用例が観察できる。したがって引主形式は主題形式として文法化して入るものの、なおも多く of 言語で引用標識と機能的に連続した面を保っているというのとみるのが正しい見方なのではないかと考える。

[6] 「今日って何日ですか？」

(B-6) *dinê=gâ* *bèhnă-yε?nê=lé?*

「今日は 何日か。」

dinê=kâ の *-kâ* は主格である。

[7] 「A さん／山田さんって面白い人ですね。」

(B-7) *?àun?àun=gâ* *yì=yâ=dê=nò.*

「アウンアウンは 面白い人だね。」

[8] 「私、土曜日って大好き。」

(B-8) *teănò* *sănèné=gò* *?ăyán* *teai?=tè.*

「私（男） 土曜日を とても 好む。」

6.5. シンハラ語

シンハラ語の生物名詞には接尾辞による形態的な対立に基づく格が 5 つあり（直格／対格／具格／与格／属格）、基本語順は SOV で系統は一般にインド・ヨーロッパ語族と考えられている（中村他 (1989: 292-295)）。

コンサルタントによればシンハラ語には「主題」を示す明示的な形式はないという。例えば「私は スピピ（人名）です。」という文は話し言葉で単に *mamə supipi: I Supipi.* というという。

[1] 「ゲノムって何？」

(S-1) *genomu* *kiya-nne* *mokak=də?* (*kiya-nne: say-INF*)

「ゲノム と言うのは 何か？」

この文のと *kiya-nne* (*say-INF*) は日本語の「って」と同じような意味で用いられている感じがするという。*kiya-nne* を取り去ると、他にいろいろなものがあり、それとの対比の上で「（それらに対して）ゲノムは何？」と訊くようなニュアンスになるという。

[2] 「A さんというのはあなたですか？」

(S-2) *kasun* (*kiya-nne*) *oya:=də?*

「カスンさん と言うの あなたか」

この文では *kiya-nne* がなくても言えるが、きつい言い方になるという。*oya:=də kasun?* と語順を逆転させれば、きつい言い方ではなくなるという。

[3] 「「しゃべる石」って、どんな石ですか？」

(S-3) *borəlu* (*kiya-nne*) *monə* *wage:* *galak=də?*

「砂利／石 言うの 何 のような 石か？」

[4] 「「しゃべる石」って、こんな石なんです。」

(S-4) borəlu (**kiya-nne**) me: wage: galak.
 「砂利／石 言うの これ のような 石（だ）。」

[5] 「A さんがやめたって本当？」

(S-5) amilə ain una: **kiya-nne** ættə=də?
 「アミラさん 去ること起きた 言うの 真実か？」

この文では **kiya-nne** が必要で、その場合の **kiya-nne** は人からの伝聞であることを示しているという。

[6] 「今日って何日ですか？」

(S-6) adə kawəda=də?
 「今日 いつか。」

この文に **kiya-nne** を加えることには違和感があるという。

[7] 「A さんって面白い人ですね。」

(S-7) amilə (**kiya-nne**) sit ganna:sulu kenek=ne.
 「アミラさん 言うの おもしろい ある人だね。」

この文で **kiya-nne** は任意であるという。

[8] 「私、土曜日って大好き。」

(S-8) mamə senəsura:da=ʔə harimə kæmə-thii.
 「私（男） 土曜日を とても 好む。」

kiya-nne を用いて言うことはないという。

7. 結果と分析

上記 6 節の調査結果を整理すると次の表 3 のようになった。なお日本語に関する判断は筆者（1965 年東京生まれ）による。表中の略号は次のようである：Wh 疑＜Wh 疑問文、YN 疑＜YesNo 疑問文、非疑＜非疑問文、引＜引主形式、存＜存主形式、引、存のように斜字体のものはその使用が任意のもの、斜字体でなくかつ太字であるのは使用が義務的なもの。「不明」は話し手にとってわからないもの、「非了解」は聞き手にとってわからないもの、「了解」は話し手にも聞き手にもわかるもの、とする。なお [主題や表現の情報上の status] の列のラベルについては 4 節も参照されたい。《 》内には主題の名詞項を略記した。なお (J) は日本語である。表 3 においては、引主形式の使用が多く、その文法化が進んでいると思われる順序に沿って左から対象言語を配置して示している。

表 3：本稿対象言語における引主形式・存主形式の使用状況の対照

疑／非疑	主題や表現の情報上の status	(J)	(M)	(B)	(S)	(K)	(T)
Wh 疑	[1] 意味不明項《ゲノム》	引	引	引	引	引	引
YN 疑	[2] 該当対象不明項《人名》	引	引	引	引	引	引
Wh 疑	[3] 表現不明項《しゃべる石》	引	引	引	引	引	引
非疑返答	[4] 表現非了解項返答《しゃべる石》	引?	引	引	引	引	引 ／ 存
YN 疑	[5] 引用項了解命題不明《山田 辞める?》	引	引	引	引	引?	引
Wh 疑	[6] 了解項・疑問《今日》	引	—	—	—	—	—
非疑	[7] 了解項・発見《山田 おもしろい人》	引	引	—	引	存	存
非疑	[8] 了解項・好悪《土曜日》	引	—	—	—	—	存

以下では「文法化」という観点から対象言語における引主形式の形式と機能の拡がりについて考察する。その際、形に関してはその形が固定しているか、機能の範囲は拡大しているか、を観察し、形が固定していれば形の面での文法化が進行し、機能が拡大していれば機能面での文法化が進行しているとみなす。なお形の面での文法化と機能面での文法化は一般に連動するものと考えられる。

まず言語間の差異を見ると、トルコ語<朝鮮語≦?シンハラ語<ビルマ語≦?モンゴル語<日本語の順で引主形式の文法化が進んでいると考える（「<」の示す関係は「機能狭・文法化未発達」<「機能拡大・文法化発達」とする）。

日本語では[1]-[3], [4]で引主形式の使用が義務的であり、了解項や非疑問文でも引主形式の使用が可能である。ただし先行研究によれば、談話照応的で明白に指示的な了解項の場合にはその使用に個人差がある。

モンゴル語では発見を示す文であれば非疑問文でも任意に引主形式が使用可能であるが、基本的に引主形式は疑問文に限られるようだ（表現不明項の返答であれば非疑問文でも使える）。ただし疑問文では義務的である。文法化はかなり進んでいるが、なお *ge-ž: say-CVB.IPFV* と *ge-deg: say-PTCP.HAB* という2つの形式を維持しており、両者の間のニュアンスの違いも維持している。

ビルマ語では了解項でない限り、引主形式が義務的に用いられる。形式は *shò=dà: say=NC.RLS* の一形式のみである。この点からはビルマ語の方がモンゴル語より文法化が進んでいると見ることもできるかもしれない。ただしシナ・チベット語族に属するとされているビルマ語は孤立型言語を起源としその性格をなお残しているため、付属語が多く、膠着的な接尾辞による変化は少ないためにこうした状況になっているとも考えられる。

シンハラ語では意味不明項でない限り引主形式の使用は任意であり、その使用も基本的に疑問文である（ただしここでも表現不明項の返答であれば可である）。非疑問文の [7] の使用は伝聞を示すための形式と考えられる。形式は *kiya-nne: say-INF* の一形式のみである。この点をどう考えるかについてはさらにシンハラ語の類型的性格についてよく検討し

ていく必要がある。

朝鮮語での引主形式の使用は意味不明項でない限り任意であり、その使用も基本的に疑問文のみである（ここでも表現不明項の返答であれば可である）。ただし朝鮮語の [2]-[6] で引主形式が任意である部分は、主題標示の $=\text{(n)un}$ ではなく、主格形式の $=\text{i}/=\text{ga}$ によってカバーされていることに注意が必要である。非疑問文ではやはり任意だが存主形式も使われる。

トルコ語では引主形式も存主形式も使われるが、全て任意である。基本的に疑問文では引主形式、非疑問文では存主形式が使われる（表現不明項の返答では両方が使用可能である）。トルコ語の引主形式は態・テンス・連接（きれつづき）・数・人称・所有人称に関して十二分な活用を見せ、元の動詞 *de-*「言う」の性格を維持している。逆に言えば文法化が進んでいない。

興味深いことに、このような言語間における差異は日本語において新用法が拡大してきた文法化のプロセスの諸段階と対応している。すなわち引主形式の主題標示機能はトルコ語／シンハラ語的な段階から朝鮮語的段階へ、さらにモンゴル語／ビルマ語的段階、日本語的段階へと文法化が進んできたものと考えられる。

ではなぜこのような言語間の差異が生じたのであろうか？ シンハラ語とトルコ語には使用頻度の高い主題標示形式がないが、日本語と朝鮮語にはあり、ビルマ語とモンゴル語にも少なからず使用される主題標示形式がある。一方、日本語も朝鮮語もはだかの形の名詞（句）でも主題や主語を示すことができる。ある程度使用される主題形式がある場合、その主題形式がとる名詞は当然「話し手にその意味と存在が前提されている談話照応的、かつ、指示的あるいは総称的」な性格を帯びてくるだろう（2.1.4.節で上述、有田・田窪（1995）を参照）。そうなるとうそでないもの、つまり話し手にとって意味や指示対象が不明な名詞、あるいは談話冒頭に導入する主題に対してはその主題形式は使用しにくくなり、それとは別の対立する主題形式が必要になると考えられる。そこで本稿における対象言語は間接情報であることを明示する「引用形式」を素材としてこうした別の主題形式（第2主題形式）を文法化により発達させてきたものと考えたい。一方、シンハラ語とトルコ語には使用頻度の高い主題標示形式がない。したがって、無標示の名詞句は必ずしも談話照応的かつ指示的であることを明示しない。そのため引主形式の文法化はそれほど進まなかったものと考ええる。

8. 今後の課題

SVO 孤立型の言語は文法形式が少なく、主題は V の前の位置によって示されるため主題標示形式が必要ないと考えられる。したがって本稿の分析から推論して、引主形式による「第2主題形式」も発達しないことが予想できる。これに対し、今回の調査で引主形式が観察された言語はどれも SOV を基本語順とし、格を名詞に後続させる言語であり、アルタイ型の言語類型を持つ言語である。しかしアルタイ言語でも主題形式を発達させる言語と（少なくとも現時点では）発達させていない言語があり、発達させていない言語ではやはり「第2主題形式」も発達していない。アルタイ型言語には広くどの程度主題形式が存在するのか、またそこに何らかの必然性（内的関連性）があるのか研究することが今後の

課題である。

アルタイ諸言語の中でもツングース諸語に関しては、うち続くウクライナ紛争のため現地調査が難しい現在、本稿で行ったような方法による調査ができなかった。ツングース諸語における（第 2）主題形式の存否、もし使用されていた場合の使用や範囲や機能の研究も今後の課題である。

2.1.4.節で見たように、「って」が使用される文のモダリティは「疑問」や「発見」、「再認識」に偏ることが指摘されている。「発見」、「再認識」の表現となれば証拠性や意外性（mirativity）と関わっていることは明らかである。証拠性や意外性と第 2 主題形式の呼応を、証拠性や意外性の観点から研究することも今後の課題である。

〔謝辞〕

時間を割いて面倒な例文の翻訳をしてくださったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げます。査読者からも多くの建設的で貴重なコメントをいただいた。記して深く感謝申し上げます。

略号一覧（Leipzig Glossing Rules にないもののみ）

=: 付属語境界 / ANF: adnomina form / HBT: habitual / NC.RLS: noun clause marker.realis（名詞化節標識・叙実法）

参考文献

有田節子・田窪行則（1995）「日本語の提題形式の機能について」『人間科学』1: 43-63.

Cevel, Ja. (1966) *Mongol xelnij tovč tajlbar tol'*. Ulsyn xevlelijn xereg erxlex xoroo. Ulaanbaatar.
（筆者未見）

江畑冬生（2022）「サハ語：特集補遺データ 「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」」『語学研究所論集』27: 471-546.

藤村逸子（1993）「わからないコトバ、わからないモノ：『って』の用法をめぐって」『言語文化論集』14 (2): 45-56.

Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish. A comprehensive grammar*. London: Routledge.

Janhunen, J. (2012) *Mongolian*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

角道正佳（2025）「形動詞 or 副動詞 モンゴル諸語の「A という B」」2024 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会ハンドアウト

菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人（編）・金周源・徐尚揆・浜之上幸（協力）（1993）『コスモス朝和辞典』東京：白水社

Kato, Atsuhiko (2004) On the markings of subjects with high topicality in pure colloquial Burmese.
益岡隆志（編）『シリーズ言語対称〈外から見る日本語〉 主題の対照』東京：くろしお出版

風間伸次郎（2022）「語順と情報構造の類型論」『日本語の類型』509-535. 東京：三省堂

- 風間伸次郎 (2024) 「モンゴル語文法研究ノート(4) —モンゴル語における情報構造の標示要素の研究：日本語との対照を通じて—」『語学研究所論集』26: 1-24.
- 風間伸次郎・山田玲央 (2021) 『28 言語で読む「星の王子さま」 世界の言語を学ぶための言語学入門』東京：東京外国語大学出版会
- 河野六郎 (1955) 「朝鮮語」市河三喜・服部四郎（共編）『世界言語概説 下巻』357-430. 東京：研究社
- Kim, Ju-Mi (2004) A study on the discourse marker 'issjanha' in Korean. *Hanmalyeonku* 14: 93-116.
- Kullmann, R. and D. Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenso. ltd.
- 松前美沙都 (2019) 「主題標示「って」の許容度について」東京外国語大学言語文化学部提出の卒業論文
- 長渡陽一 (2019) 「エジプト・アラビア語における否定、形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23: 181-188.
- 中村尚司・土田滋・ディリープ チャンドラール (1989) 「シンハラ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第2巻』292-300. 東京：三省堂
- 西山祐司 (2003) 『日本語の名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句—』東京：ひつじ書房
- 丹羽哲也 (1994) 「主題提示の「って」と引用」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』4: 79-109.
- 奥真裕 (2019) 「トルコ語の情報構造の諸要素」『語学研究所論集』24: 189-194.
- 朴序敬 (2006) 「「ッテ」の使用頻度: 1992 年と 2003 年の調査から」『ことばの科学』19: 113-128.
- 佐藤雄一 (2011) 「引用形式「って」における主題提示用法」『共立国際研究: 共立女子大学国際学部紀要』28: 1-20.
- 竹内和夫 (1989) 『トルコ語辞典』東京：大学書林
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』211-233. 東京：くろしお出版
- 手塚正昭 (2001) 「「って」形式の主題」『宇大国際語論究』12: 21-35.
- トゥザライン (2015) 「ビルマ語の *hà*、*kâ* に関する考察 —日本語の「は、が」との対照から—」『日本語・日本学研究』5: 49-64.
- 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第3巻』567-610.
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎（編）(1993) 『朝鮮語辞典』東京／ソウル：小学館・金星出版社

A Contrastive Study on the Topic Markers of the Unfamiliar Arguments or Propositions

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: topic, contrastive study, quoting verb, existential verb

Japanese possesses a topic-marking form *=tte*, primarily used in spoken discourse. Unlike the standard topic marker *=wa*, *=tte* originates from the quotative *=tote* and functions to highlight topics unfamiliar to the speaker, frequently appearing in interrogative contexts. Similar unfamiliar-topic markers derived from verbs of "saying" or "quoting" are also observed in other languages, such as Turkish (*de-*), Mongolian (*ge-*), Korean (*ha-*), Burmese (*s^ho*), and Sinhalese (*kiya-*).

This paper defines these elements as "Quotative-derived Topic-marking Forms" (Quot-forms) and provides a contrastive linguistic analysis across the six aforementioned languages. The investigation reveals a hierarchy in the degree of grammaticalization of Quot-forms as follows:

Turkish < Korean $\leq$? Sinhalese < Burmese $\leq$? Mongolian < Japanese

This study further explores the functional motivations behind these inter-language differences. The analysis suggests that the development of Quot-forms is closely related to the presence and frequency of primary topic markers. In languages like Japanese and Korean, where primary topic markers are well-established, these markers typically govern discourse-anaphoric and referential nouns whose existence is presupposed. Consequently, a functional need arises for a "secondary topic form" to mark nouns that lack these characteristics—such as those unknown to the speaker or newly introduced into the discourse.

The author concludes that these languages have grammaticalized quotative forms, which inherently signify indirect information, to fulfill this specific functional role in the topic-marking system.

(かざま・しんじろう kazama@tufs.ac.jp)